

参考文献

- Itoh, K. 1991. Life cycles of rice field weeds and their management in Malaysia. TARC, 1-92.
- Vaughan D. A. 1994. The wild relatives of rice - A genetic resources handbook. IRRI, 1-137.
- Wahab, A. H. and Suhaimi O. (1991) Padi angin-characteristics, adverse effects and methods of its eradication (in Malay with

- English abstract). Teknol. Padi. 7, 21-31.
- Watanabe, H. *et al.* 1999. Weedy rice complexes: Case studies from Malaysia, Vietnam and Suriname. Proceedings of International Symposium on Wild and Weedy Rices in Agro-Ecosystem, 42-54.

統計データから

お茶の生産動向

お茶は「日常茶飯事」と言った言葉があるように、日本の日常生活に定着し、和食との相性が良く、米や魚を中心とした和食文化とも密接なつながりがある。

お茶の主要産地を表に示した。とくに、静岡、鹿児島県の栽培面積が突出し、この2県で約6割を占める。産地ごとに特色ある茶生産が行われている。煎茶が主体の静岡、鹿児島、宮崎県、かぶせ茶の多い三重、奈良、福岡県、玉緑茶の多い長崎、佐賀、熊本県、玉露や抹茶の原料となるてん茶の多い京都府などである。それ以外にも、日本の北から南まで幅広い範囲で栽培されており、とくに、農業の条件不利地域である中山間地域において、重要な基幹作物となっている。その産出額は、生葉で495億円、荒茶段階では直近5年（H28～R2）の平均で883億円の産業規模を形成している。このように加工・流通・販売と繋がる茶業は、地域経済・雇用確保にとって重要な産業となっている。

令和4年度のお茶の全国の経営体数は12,325戸で、7年前

の6割強と、年々減少している。また、平成12年には49%であった65歳以上の割合が、令和2年には62%と高齢化が進んでいる。栽培面積は穏やかに減少しているものの、茶農家1戸当たりの栽培面積の拡大は進み、とくに、鹿児島県では規模拡大が顕著である。

緑茶の消費量について、平成23年以降、緑茶（リーフ茶）は緩やかに減少しているが、緑茶飲料（ドリンク）は増加傾向にあり、てん茶（抹茶）の需要も高く、生産量は約8万トンで推移している。

お茶の輸出量は、米国等の日本食ブームや健康志向の高まりにより、この10年間で約2倍強に増加し、令和3年度は6,179tである。主な輸出先国の輸出量シェアは、米国が36%、台湾24%、EU・英国14%、シンガポール5%、マレーシア4%となっている。（農林水産省 茶をめぐる情勢 令和4年6月）

(K. O)

表 お茶の主産県と生産の特色

順位	府県名	栽培面積 (ha)	荒茶生産量 (t)	経営体数 (戸)	1戸当たり栽培面積 (ha)	生産の特色 (順位は令和3年度のもの)
1	静岡	13,800	28,600	5,712	1.4	煎茶、特に深蒸し煎茶が主体。てん茶（抹茶）は全国3位。
2	鹿児島	8,250	26,700	1,081	3.6	煎茶が主体。てん茶（抹茶）は全国1位。多様な品種構成。
3	三重	2,590	5,250	569	2.0	玉露及びかぶせ茶は全国1位。
4	京都	1,540	2,600	473	1.6	玉露及びてん茶（抹茶）は全国2位。
5	福岡	1,500	1,750	631	1.3	玉露及びかぶせ茶の生産が全国3位。
6	宮崎	1,230	3,000	297	2.0	煎茶主体。釜炒り茶は全国2位。
7	熊本	1,100	1,290	329	1.3	玉緑茶は全国3位。
8	埼玉	729	729			煎茶が主体。
	全国	36,900	77,200	12,325		

注) 栽培面積と荒茶生産量は令和4年度、経営体数と1戸当たり栽培面積は令和2年度